
公がチートな女性たちとクランを組んで。そして、いつのまにやらハーレムになっていくお話

診見 観身

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VRMMORPGの世界でチートな主人公がチートな女性たちとクランを組んで。そして、いつのまにやらハーレムになっていくお話（題名仮：題名が長い！）

【Nコード】

N3966Y

【作者名】

診見 観身

【あらすじ】

VRMMORPGにログインしようとしたのだが……なぜかVRMMORPGの世界にいた。

しかも、そこでログアウトできず。

二つの陣営に分かれて死をかけたサバイバルゲームが始まった。

巻き込まれたのだが、その時に一人の女のプレイヤーに会ったことから、

協力することになり動き出す物語。

生き残るために様々なことをして、増えていく仲間たちと思ったら女の子ばかり。なぜか勝手にハーレム状態になる主人公。

RPGの能力をそのまま引き継いだ主人公がチートな感じです。チートでハーレムが苦手な方は遠慮してください。

体の一部が欠損する表現などが出てくるので苦手な方は遠慮してください。チートハーレムVRMMO物です。ヒロインの女性たちもかなりのチートです。

ブローグ

二十一世紀が過ぎて数十年たった日本。

そこでは、VRMMOが世の中に出回っている。

最寄りの接続場所に行けばすぐに入れるゲーム世界として有名だった。

普及しているかのように思われているがそこには影の部分があつた。

ここに、VRMMORPGにログインしようとした一人の男の姿がある。

高校に通っている美濃 みの 雅一 まさかず は、今日もいつも通りにRPGの世界に入っていくつもりだったのだが……

「さて、ログインしてっ」と

雅一は、VRMMORPGに入っただつもりだった。

「……なんじゃこっちはー!」

雅一が最初に現れた光景は、崩壊したビル崩れかけの家などのごく

ありふれない風景だった。

「あれ……俺、来る場所間違えたのかな？」

辺りを見渡してみるとそんな光景が続いている。

しかし、雅一は、自分の格好を見てみるといつもRPGで使っている装備だった。

「これどう見ても……俺が使っている剣だよな……新しいステージでもリニューアルされたのかな……？でも、中世ファンタジーの世界では、これはいくらなんでも運営側がおかしいよな……」

雅一は、いつも緑あふれる森の中などでゲームをしていたはずだった。

モンスターを倒したりクエストをクリアしたりしていたはずだった。

雅一にとつたらこの光景は異常だ。

「しかたない、ログアウトしてみるか」

ログアウトするために、MCDを取り出す。

MCD・・・正式名所でメニユーコンソールドライブというVRM MOでは、誰もが持っている物だ。

それを使って道具やお金を確認したり、ログアウトしたりする装置だ。

「あれ……できない……こわれたのか。いやここに壊れ何という概念

「はいはずだからありえないな」

MCDのログアウトボタンを何回も押すがログアウトできなかった。壊れているということも考えたのだが、あくまでここはヴァーチャルであって壊れるといことはありえないのだ。

「何なんだよ!!」

一人で叫んでいた時に、RPGでは絶対に聞こえない銃撃の音が聞こえた。

『バン、ダン、ドドドッ!』

「何だ!?何だ!?!」

雅一は、銃撃の音を不思議に思っ近づいてみると、一人の女の人
が、4人の軍服を着た人たちと銃撃戦をしていた。

その女の方は、160?ぐらいで胸が大きく、白いのタンクトップ
を着て、下はオレンジ色っぽい茶色のズボンをはいている。

そして、オレンジ色の髪の毛を後ろでまとめている。

たぶん、高校生ぐらいだろうと雅一は思った。

そんな女の方が銃の形からAK-47らしき武器で応戦しているの
を雅一は見た。

何が起きているのかわからなかったのだが、とりあえず助けること
にした。

「いくらなんでも、一人で四人と戦うのはきついだろう。」

そうして、雅一は走った。

たとえ銃を持った相手でも四人ぐらいならどうにかなるだろうと思った。

「ほら、こつちだ!!」

雅一は、一人目の軍服の奴に横から奇襲をした。

「一人目!!」

軍服の奴は、一人倒れたが、3人ともこちらに気付いて銃を撃とうとしたのだが。

「スキル、迅雷」

雅一は、瞬間的に一人の軍服の奴の懐に入り。

剣で切る。

雅一が使ったスキル“迅雷”は、素早さを高くすると使えるスキルで相手の目を錯覚状態にさせる事が出来る。

敵は、ずっとそこにいるかの様子に見せかけて実際は、動いているという、目の錯覚を使ったスキルだ。

慌てている、他の奴にも切りかかり

「最後に、終わり！！」

最後の奴にも切りかかった。

雅一は、四人の銃を持った敵を倒してしまった。

「意外に楽勝だったな…」

倒した後、戦っていた女の人がいた方を見たときに

「いない…？」

『力チャ』

そして、後頭部に銃を向けられた感覚があった。

「あなたは、何者？」

そう、冷たい声で訊かれたのだ。

1 下ろされる銃 衝撃の事実

「あなたは、何者？」

雅一は、動けないでいた。

たとえ、当たっても死ぬわけではないのだが。

V R M M O は、実際に少しの痛みを感じる。

痛覚に、電気信号を送って擬似的にダメージを与えるのだ。

R P G や、他のジャンルは低めで設定されているが。

F P S は若干高い。

頭に撃たれるということは結構痛い。

そう思っている雅一は、動けないでじっとしていた。

やがて、相手が話しかけてきた。

「もう一度聞くけど、あなたは誰？所属を言いなさい。」

「俺は、ただの通りすがりの英雄で…」

『トン』

銃を頭につけられた雅一はビビる。

「最後のチャンスをあげるは、あなたの名前を教えなさい。」

最後のという部分に過剰に反応した雅一はあきらめて、

「俺の名前はミノマサだ。本当はR P G にログインしたはずがこん

なとこにいてたまたま襲われているあんたを助けたただけだ！」

早口に一気にしゃべった。

ミノマサと言うのは、ゲーム内での名前で、ただ名字と名前の最初を合わせただけの普通の名前だと雅一は自負しながら言った。

「ミノマサ……聞いたことない名前ね。あなたぐらいの強さなら有名になっていてもおかしくないのに、しかもファンタジー凶なのに……」

ファンタジー凶というのは、FPSの世界でいかにもRPG的な服を着てナイフなどを武器にして戦う奴らの事だ。
RPGの中にも、ミリタリー凶がいて、迷彩服や銃っぽい武器を持っている。

「だから、言っているだろ！RPGにログインしようとしたけど何かここにいるって！」

未だに銃を頭から話してもらえていない状況から必死に説得する雅一。

「なら、このゲームの名前と今の陥っている状況のを知らないのね？」

ちよつと緊張が和らいだ声で言ったために安心しつつ雅一は言った。

「ああ、もちろんだ。たぶんお前たちの敵にもならないだろうし、攻撃もしない！」

「まあいいわ。“でも”、手は上にあげたまま！」

銃は、頭から外されたが、彼女の言うことを聞くことにした雅一は手を挙げたまま振り返った。

「やあ。」

たしかに、先ほどまで戦っていた女の人がそこにいた。しかし、彼女は銃をこちらに向けたままだった。

「あの〜銃を下ろしてもらえませんか……？」

弱弱しく下から目線な感じで雅一は尋ねる。

「まだ、私はあなたの事を信用していない。さあ、MCDを見せなさい。」

「あの〜手が使えないと出せないんですけど……」

雅一は手を挙げたまま腰にあるMCDをとれないでいる。

「わかったわ。まったくめんどくさい男ね。」

そう言つて、雅一に近づき腰にあるMCDを奪う。

「乱暴だな」

彼女は雅一の言葉も無視し、銃をこちらに向けながらMCDを触っている。

「器用だ……」

数分もしたら、雅一の方に向いた。

「本当の事みたいね。まずは、あそこの建物の中に行きましょう。
…いい人材をゲットしかも」

彼女が指をさした建物の中に行こうと歩き出す。

しかし、雅一は最後の言葉をうまく聞き取れなかったのだ。

「やっとわかってくれた…」

「早くいきなさい。」

「は、はい！」

雅一はやや駆け足気味に建物の中に入って行った。

3階建ての中の一階部分にそうとうする所に二人とも入って行った。
まともな原型をとどめておらずボロボロの建物の中で、彼女は銃を下ろした。

「自己紹介まだだったね。私の名前はカノン。『月下の灯』という
クランのリーダーをしている。」

銃を下ろして、出っ歯ているコンクリートの上に腰を掛けたため、

雅一もそうする。

「カノンな、よろしく。それで、今の状況を教えてくれないか？」

そして、彼女の口から衝撃的な事実を聞く羽目になる。

「ここは、VRMMO FPS、ガン・カウンター・テロと言うゲーム。そして今、命を懸けた“サバイバルゲーム”をやっている。」

1 下ろされる銃 衝撃の事実（後書き）

評価、感想など待っています。

2 事実の説明 GCT説明

「ここは、VRMMO FPS、ガン・カウンター・テロと言うゲーム。そして今、命を懸けたサバイバルゲームをやっている。」

「……はっ！命を懸けたサバイバルゲーム？」

カノンは、雅一に事実のみを伝える。

「ガン・カウンター・テロって。最近話題のFPSか！」

雅一は、ガン・カウンター・テロ。

GCTの存在を思い出す。

VRMMO FPSの中でもかなりのリアルティを追求して、乗り物とかに乗れる、とかそういう宣伝をしていたことを思い出した。

「そう…たぶんあなたが思っているのであっているはず。それで、ガン・カウンター・テロやったことある？」

「いや、宣伝で知っただけで、やったことがない。そもそもFPS自体、2〜3年前にちよつとやってただけだから」

雅一は、ここ1〜2年ずっとRPGをしている。

そしたらRPGの方がやばいレベルになったのだ。

「なら、簡単に説明するわね。ガン・カウンター・テロは、日本を舞台のFPS。年は、201X年の設定でまだ冷戦が続いている。そして、私たちプレイヤーは正規軍か、解放軍かを選べる。それぞれバックに大国がいて、正規軍にはソ連。解放軍にはアメリカがつ

いているの。このゲームの面白さは、なんといつても乗り物に乗れることと水の中に入れたり、パラシュートで降下できるのよ！すごいと思わない！？それぞれ、バツクの国からの任務をこなしていつてレベルを上げたりするの。」

「ああ……」

簡単に説明するところがすごい長く説明されて唖然としている雅一に追い打ちをかける。

「それで今の状況は。今日は1周年記念と言うことで何やらイベントがあると告知されていたの。それで、みんなログインしてきたらいつもと違う場所にいて。そしてたら急に変な人が現れたの！この世界の神だという人が。そしてその人が正規軍と解放軍、それぞれ1万人に分かれてサバイバルゲームを開始します。この世界では、ゲームオーバーになったら、“死”を意味します。それでは、頑張ってくださいねって言うてきたんだよ！」

「ああ……」

カノンは雅一にさらなる機銃掃射並みの口撃を開始する。

「それでそれで、いざゲームの中に入ったと思ったら、クランメンバーの子たちと別れちゃうし、それで、あゝどうしようと思ってたら、NPCの奴らに襲われて君に助けられたっていうわけ。理解できた！？」

「ああ、もう完璧だ。」

雅一は、これ以上聞きたくなかったためにまだ聞きたいことはあつ

たのだがやめておいた。

「そう…それで状況の確認はできた!？」

「ああ、サバイバルゲームが始まってゲームオーバーになると死ぬって……死ぬ!!!??」

雅一は、改めてカノンの言葉に疑問を持った。

「死ぬ!？」

「そう、死ぬみたいなの…だから、あなたに協力してほしいの速くランメンバーを集めないと、死んじゃうかもしれない。だから助けて!」

カノンは、このチート級の奴を手元に置きたかったただけだったのだが、雅一は本当に助けてほしいと思って

「わかったよ。どうせ出られないんでし、誰かと一緒の方が気が楽だしな」

「やった!!それじゃあ、まずはMCD貸して。GCTのデータをインプットするから。」

「ほい!」

MCDを渡す。

そして、数分後に

「これでよしと。これから君は、解放軍で月下の灯のメンバー。よろしくね」

カノンは雅一に握手を求める。

「ああ、よろしくな。」

彼女の手は、暖かく柔らかいと雅一は思った。

「それじゃあ、まずは一番近くにいるシマケンの回収からね。」

MCDで、地図を確認しながら言う。

「シマケン?」

「私たちの名ドライバーよ!」

そうして、二人はシマケン!?を探しに戦場に出るのであった。

3 カノンの実力 銃を手に入れる

二人は、ビルや家などを伝って慎重に行く。

「ところで、ここが日本ならここはどこなんだ？」

一戸建ての家の塀の後ろに隠れて雅一は尋ねる。

「ここは東京都と神奈川との県境あたりよ。そして、シマケンはある自動車会社の工場にいるみたい。」

そう言つて、MCDの写っている地図を見せる。
確かに青色の点滅が光っている。

「今、無線をむやみに使えないの。あつて、MCD同士でじかに接続しないと盗聴の恐れが高くなるから。それで、暗号を送ったのKEWつて」

「KEW？」

二人とも塀にもたれかかり呼吸を整えている。

「KEW。ケース、エマージェンシー、ウェイト。緊急の時に使う暗号で、とにかく動いて味方と合流してつていう意味。」

「なるほどウェイトはおとりだな。」

「そう。味方と合流することを第一優先にする命令で、ラッキーな事にみんなこの東京都と神奈川県の県境に集まっているから、簡単

に合流できるはず。シマケンは、運転が上手だから、すぐに車を確保したかったのじゃない。自動車会社の倉庫にでも立てこもっているんじゃない。さあ、休憩終了。進むわよ。」

「おう！」

そうして、少しずつだが進んでいく。

そして、川沿いの堤防の一手前まで来る。

「ストップ」

カノンは、突然手を横にだし、小さな声で言う。

そして、ハンドサインかなんかのだろうが、親指を立てて指をさす。

雅一は、その方を見てみると、二人の軍服の男が立っている。

カノンが動き出す。

しかし、雅一にはハンドサインで知らせる。

両手を交差させてばってんを作っている。

たぶん動くなという意味なのだろうと解釈して

雅一はうなずくとカノンは動き出す。

二人は堤防の下の住宅街との間にいて、周りを見ながら監視している。

そこへカノンは背後から少しずつ近づいていく。

木の後ろに隠れた。

そして、石を持って自分がいる位置とは反対側へと投げる。

『カラン』

二人はすぐの音に反応すると同時にカノンが飛び出して、一人目を首にナイフを当てて切り殺す。

そして、もう一人の男が振り向こうとした瞬間。

カノンは相手の口を押えて、眉間にサイレンサー着きの拳銃を当てて静かに撃つ。

『パス』

音と共に男が倒れる。

「来ていいわよ。」

そう言葉があつた後に雅一は、カノンのそばに行く。

「NPCね。」

「何でわかるんだ？」

NPCにも関わらず消えていなく倒れている。

しかもしっかりと鮮血を見せている。

「一言もしゃべらなかつたし、こんなところでボサッと突っ立っているのは、NPCか、芋ぐらいしかいないわ。」

芋というのは、その名の通り、地中に埋まっているように動かないことの意味が変わって、とっても下手なことをあらわす言葉だ。

「でも、さっきのは鮮やかだったな」

「そう、ありがとう」

簡単に一言述べて、カノンは、二人の男のベルトなどを取る。

「ラッキー、AKの弾薬があつた。それに手榴弾とスモークもある。それにあなたに」

そう言つて、拳銃を投げてきた。

「もしものため護身用よ。拳銃はないよりあつたほうがまだから。」

「ありがとう」

雅一は、久しぶりに拳銃を持つ。

でも、昔雅一がやっていたVRMMFPSとは、似ても似つかなく。

とても精巧にできており、重量もしっくりくる感じた。

「それは、MP443通称グランチ。NATOの弾薬とも相互性があるし、意外に弾薬が多いから使い勝手のいい銃ね。」

そして、ホルダーも渡してくる。

「そっぴー何でお前ってAK使ってるの？解放軍のバックはアメ

リカ何だから銃弾とかに困るだろ？」

AKと言うのは、元々ソ連が開発したためにアメリカなどと弾薬の相互性がない。

「それは、やっぱり使いやすいからかな？でも、任務によっては変えることが多い。だって、AK―47はバラムキ専門だもん。」

AK―47は、命中率が極端に低いが、当たった時のダメージ大きく。

扱いやすさや耐久性などがいいためテロリストなんかには好まれる銃だ。

「そついや、どうやって、武器を手に入れるんだ？」

雅一は、ここに来てから人の住む気配をまったく感じなかった。

「まあ、その説明はおいおいするわ。この銃を持っているわけは、ただ前にログインして使っていた武器がそのまま今回のログインに反映されたみたい。だから仲間が集まったら武器の補充をしないとね。」

「そうなんだ。」

雅一はカノンが説明をはぐらかしたのは気に入らないと思ったが仲間に出会う方が先だと思って頷く。

カノンの実力がしれたいい機会だった。

二人は、まだまだ先へと進んでいった。

3 カノンの実力 銃を手に入れる（後書き）

銃を本格的に登場し始めたのですが、

くわしく説明するかどうしようか迷っています。

もし、銃関連でわからないことがあったら、検索して調べることをお勧めします。

なるべく、銃の知識がない人でも楽しんで読んでいただくように努力します。

4 切り込み シマケンの正体

二人は、少しずつ進んでいった。

しかし、敵と遭遇することなく、目標の工場へとたどりついた。

「ようやくか」

雅一はちよつと背伸びをするのだが

「伏せて！」

その言葉を発した後カノンは、雅一を無理やりしゃがませる。

「どうしたんだ？」

小声で聞く。

「何か、向こうにある2つて書いてある倉庫で人の音がするの」

「本当か？」

足音すら聞こえていない状況で迷っている雅一だったのだが、

「さあ、あなたの出番よ。」

「俺に何させるんだ!？」

「ちよつと様子見てきてくれない？」

親指は2と書いてある倉庫を指さしている。

「ああ、わかったよ」

「私も後ろから付いて行くから。」

雅一は、近づいてみると軍服の男が三人立っていた。
そして、ドアを開けようとしている。

「今がチャンスだな。カノン一人は任せる。お前が発砲したと同時に俺は突っ込むから。」

「了解」

気づかれないように近づき50メートルを切ったところで、カノンがAK-47から銃弾をまき散らした。

「ほらほら！こつち！」

そのバラマキで一人が倒れて二人が体勢を立て直し銃をこちらに向けてようとした時に雅一が動いた。

「スキル疾風」

スキル疾風と言うのは通常の移動速度を1.5倍上がるスキルだ。

そして、雅一は、一人目の奴の心臓部分をぶっさし倒れかけて横に

なっていると同時に、さつき手に入れた拳銃グランチをホルダーから抜き取り。

『バン、バン、バン』

三発銃弾が飛ぶ。

その内二発が胸と腹部に直撃して倒れる。

その後カノンが、頭に鉛弾を撃ち込み完全に沈黙させる。

雅一は、倉庫のドアを開けて中に入って行くと。

「止まりなさい。」

その手には、MACを持った女の子が立っていた。

雅一はつくづく女の子に狙われるのが趣味らしいと思ってしまう。

身長は150? 前半くらいで胸が少し大きく、赤髪のショートの子だ。

「あの銃を下ろしてもらえませんか?」

雅一は、カノンと同じように下から目線の言葉で話しかける。

「あんた、誰かって聞いているの!」

「俺はですね。ミノマサと言うプレイヤーでしてね。今は月下の灯

というクランメンバーなのですよ。はい。」

なるべく、丁寧に話したつもりだと雅一は自負する。

「月下の灯… っでも、あんたみたいな男はいなかったはず。」

女の子は月下の灯と言う言葉に反応している。

その時にカノンが中に入ってくる。

「その人、新しく入った人だから。」

カノンを見た瞬間女の子に安心感に包まれたような雰囲気になる。

「そうなんですか？それなら許してあげる。」

「許してあげるって」

この女の子の性格をだいたい把握できた雅一だった。

「この子がシマケンよ」

「えっ！名前からして男じゃないの？」

雅一はずっとシマケンを男だと思っていた。

「それは、兄貴のIDです。たまたま兄貴が途中で放置したこのIDを借りてやっていましたから。できる限り。シマリと呼んでください。」

「ああ、わかったよシマリ」

そうして、二人はシマケン…シマリと合流できたのだ。

「次は、アカネとキリとの合流ね」

カノンはMCDを見ながら言う。

「シマリ。車の確保はできた？」

シマリは、自慢げな顔になり

「もちろんです。こっちに来てください。」

そこには、高機動車があった。

高機動車と言うのは、陸自が配備している人員輸送用車両の事だ。

「さすが。シマリ！これでこれからの移動が楽になる。後、敵さんからの土産もあった。」

そうして、カノンは銃、弾薬と手榴弾を持ってくる。

「銃は、AK-47が二丁と、あとRPKにその弾薬の75連ドラムマガジンも二つもあったわ。これで、軽機関銃を使う事が出来る。」

RPKとは、軽機関銃で75発撃つ事が出来るソ連の銃だ。

「それでは、二人とも行きましようか。シマリ運転よろしく」

そうして、銃などを持って高機動車に乗り込み。

シマリがエンジンをふかして、倉庫から走り去った。

新たに増えたシマリと共に二人との合流するポイントに向かうのであった。

5 二人の戦闘 二人の合流

3人は高機動車に乗り

廃材やコンクリートの破片をよけつつ進んでいった。

「でも、車だと目立つんじゃないか？」

雅一は、後ろに座っていたためちよつと乗り出して助手席に座っているカノンに聞くと。

「大丈夫なんじゃない？見つければAKでも撃ちまくって逃げればいいんだし」

そっけなく返事が返ってくる。

「そんなものなのかな」

「そうそう。」

どどん北西の方に進んでいき学校が見える。

「ここが、二人が立てこもっている場所ね。」

校門の前で高機動車が止まる。

「それじゃあ、シマリはここで待機。私たち二人で様子を見に行きましょう」

「わかった」

「はい」

返事をしたと同時に銃撃戦が聞こえる。

「毎回こんな感じだよな」

雅一がうなだれながら言う

「あなたって疫病神なんじゃない？だって、間違ってロゲインしてきてこんなことに巻き込まれたんだから」

ロゲインを間違えてきているのを知っているのはカノンだけなのでシマリは首をかしげる。

「疫病神って失礼な！」

雅一は抗議するのだが無視されて

「さあ、行くわよ。」

そうして、カノンは、AK-47を二丁持ち。

雅一は剣とグラッチをホルダーにしまって進んだ。

『バン、ドン、ドトドバババ』

銃撃の音がだんだんと近くなってくる。

カノンが俺を手で押さえる。

「この先みたい。」

雅一は、そつと覗くと教室をはさんで銃撃戦をしていた。
女の人が一人で銃撃している。
それに、三人の軍服の男が応戦していた。

「やばいんじゃない!？」

雅一は心配そうに言うのだが

「大丈夫よ。絶対勝てるわ」

女の人がM4を窓越しに撃って応戦するのを、AK-47を持った
軍服の男が応戦している。
徐々にコンクリートが削られていき穴が開いている個所も多数み
られる。

それでも、M4をぶつ放しては隠れと威嚇しながら撃っている。

「本当に大丈夫？」

雅一がこの劣勢な状況で心配している。

「もうそろそろ終わるかな。」

カノンがそう言うとき突然一人が倒れる。

そして、紫色の髪のツインテールの女の子が突然出てきて、ナイフ
でもう一人を切る。

そして、その間に教室に立てこもっていた女の人飛び出てM4をぶっ放し最後の一人も倒れる。

戦いが終わるとカノンが普通に歩いていき

「さすが！キリにアヤネもやるね」

そう軽い感じの口調で言いだす。

「まあ、こんな所ね」

そう言ったのが先ほどまで教室に立てこもっていた女の人で黒色で髪が長くとてもきれいな人だった。

「当然」

簡単に一言で終わらせたのが身長が150？前半ぐらいの紫色の髪の毛のツインテールの子だ。

そして、雅一が出ていくと、M4と拳銃を二人同時に向けられる。

「誰？」

「……」

雅一は、なれたように手を挙げて

「撃たないでくれよ。」

「大丈夫よ二人ともこの人新しく仲間になった人だから。」

そして、カノンがフォローする。
そういわれると二人とも銃を下ろす。

「俺の名前はミノマサだ。よろしく!」

そう言うつと黒髪の人が、

「私のは、アヤネ。まったくカノンはいい男を見つけたじゃない」

「いやいや、違うつて」

そんな風に会話が繰り広げられると

「…キリ」

紫色の髪のツインテールの子が簡単に自己紹介を終える。

「アヤネにキリもよろしくな!」

「最後に、シモハルとカオルとの合流だけど結構距離があるから明日にしましょ。シマリを車ごとこっちに呼んでここで一泊ね。」

カノンがMCDを見ながら言い

すぐさまシマリに連絡するとももの数十分でこちらに来る。

そして、アヤネとキリとの再会に喜びつつサバイバルゲーム二日目
が過ぎていく。

そして、夜の見張りを3時間おきの交代にすることになる。

雅一はぼつと星空を見る。

「これって全部ヴァーチャルだもんな」

雅一は、今までゲームを詳しく見たことがなかったので改めて感慨にふけていた。

「しかし、今日はいろいろなことがあったよな」

一日でいろいろなことが起きた。

サバイバルゲームの開始やカノンたちと仲間になったりといろいろなことがあった。

そして、雅一はこの先も不運がないようにと切に願った。

6 二人が逃げる 雅一が飛び出す

一夜明け、また移動を開始する。

5人と大所帯になりつつあるが高機動車は、定員10人なのでまだ余裕がある筈なのだが。

後ろには銃などの弾薬が置いてあり意外にスペースがないのも現状だ。

キリは、黙って座っており。

アヤネは足を組みながらリラックスしている様子であった。

雅一もそれなりにリラックスしている様子だった。

敵に遭遇することなく進んでいった。

時速40キロと遅めなのだが歩いていくよりは十分違うなと雅一は実感した。

ゆったりとドライブ気分でくつろいでいたのだが一発の手榴弾によって変わってしまう。

『ドカッ。バンバンドド、バン、ドカン』

急に戦闘が始まったのだろうか突然轟音が鳴り響く。
しかし、周りで起きたわけではなく。

この近辺で戦闘が開始したようだ。

「ストップ」

カノンの声と共に車を一旦停止させる。

「キリ状況確認よろしく」

カノンに言われてキリは、

「了解…」

簡単に装備などを点検してキリは出ていく。

「俺もいく」

そっいつて雅一も付いて行こうとしたのだが

「あなたは邪魔なだけ…」

そう言つて断るのだが雅一は無理やり付いて行こうとする。

「カノンいいよな？」

雅一はクランリーダーであるカノンに訊ねる。

「いいわよ。キリと一緒に行ってきても」

「カノン…」

キリが目で訴えるがすぐに諦めて

「付いて来て」

一言だけ言われた。

「わかった」

そして、キリと共に瓦礫の下を通って行き少し広い道路に出た。

「ストップ」

キリに止められて雅一が目の前に広がった光景は、20〜30人の軍服のNPCと装甲兵員輸送車二両から必死に逃げている二人の女の姿だった。

二人とも建物にそって銃撃しつつ逃げているがどう見て不利なのは確かだ。

装甲車両からの機銃掃射も相まって余計不利な状況だ。

「おい、どうするんだよ!？」

そんな心配はよそにキリは、冷静に戦場を見ていた。

「敵は、26人に、装甲兵員輸送車二両はたぶんソ連のBTR-Dだから。追われているのは解放軍。」

「解放軍って味方じゃないかよ!どうするんだ!？」

「二人だけで対処は無理。カノンたちを呼ぶ…」

そう言つて片耳だけでつけるヘッドセットを装着して連絡を取る。
MCDとワイヤレスでつながっており通信の際には便利なものになっている。

そんな中状況は刻一刻と変わっている。

二人は頑張つて逃げてはいるが追いつかれそうで、ついに3階建ての建物に立てこもつた。

一階部分で必死に応戦はしているが数が数なので反撃の隙がわずかなかった。

徐々にせまる敵に何もできずにいたのを見て雅一は手にこぶしを作り握る。

「キリまだか!？」

雅一は、キリに催促するが、

「まだ」

しっかりと冷静な目で戦場を見ている。

そんなキリに愛想つかした雅一は自ら行動することにした。
あと一歩で中に入られそうなところで雅一は動いた。

「ちょっと」

キリの叫びも無視し。

「ほらこつちだ!！」

大声で誘導しながら

「炎の魔法、ファイヤー」

レベルが低くても使える魔法なのだがFPSは魔法がないためかなり有効だ。

それによつて炎の壁ができ。
数人は巻き込まれる。

こちらを見て敵も発砲する。

『ドドド、ドドド、ドドド』

ぎりぎりビルの中に飛び込む事が出来た。

「大丈夫か？」

真っ先に二人の無事を確認した。

「うん」

そう返事したのは、茶髪のサイドポニーの女の子だった。

「ありがとうございますわ」

丁寧な物腰で言ったのが金髪のロングのFPSには似合わないお嬢様のような女の人だった。

「助けてくれたのはありがたいけど、これからどうするの？」

茶髪のサイドポニーの子が聞いてきたため。

「任せとけ！」

雅一は剣を持って戦場へと飛び込んだ。

7 剣が折れる 集合と急襲

雅一は、まず三人に狙いをつける。

「スキル神風&疾風」

神風は五倍速くなるスキルで疾風と合わせるにより八倍に上がる。

ただしこの合わせスキルを使うと一日スキルと使うことができなくなる。

八倍の速さに達すると敵の動きがスローモーションに見える。

そして、銃から吐き出される銃弾も野球ボールが飛んでくるときの感じみたいな速度に見えてくるのだ。

雅一は銃弾をよけつつ、銃弾を一つ切りそのまま一人の男を首ごと切断する。

そして、もう一人の男には、片手でグラッチを抜き三発撃つと一発が顔に当たりそのまま倒れる。

もう一人が銃弾を至近距離から撃つがしゃがんで避け二つ銃弾を切りながらそのまま首ごと切る。

なぜ雅一は首や顔を狙うかと言うと胴体などには、防弾もしくは防刃チョッキなどを装備しておりダメージが少ないと考えたからだ。

しかし、首を切るときの感覚はとても嫌なものだと雅一は感じる。

残りも数人ちよいに減ってきたところで後ろからサイドポニーの子がUMPでリズムよく撃っている。

UMPとは、サブマシンガンで軽さと凡庸性に優れた銃だ。

それをリズムよく撃つことによって二人に当たり他も一時的に動けない状況が出来た。

たとえ一瞬であつても雅一にとっては長い時間でその際一人に近づきグランチを撃ち一人を倒すと隣にいた兵にもグランチをおみする。

そして、五メートルぐらい離れた兵から放たれた銃弾を一気に五発分を切る。

そして一人を突き刺し、残り四人と装甲兵員輸送車二両が残る。

そして、装甲兵員輸送車から銃弾の嵐が降ってくる。

それを回避しきれない分を剣で銃弾を切っていたら。

『ピキ、ピキピキ。パリン』

使っていた剣の剣先が見事に真つ二つになってしまった。

「えっ！」

雅一は頑張つて素材とお金を集めて作った剣にものすごい愛着があ

ったのだが壊れてしまつてショックを受ける。

しかし、戦場は無常なものでショックを受ける暇もなく銃弾の嵐が降り続く。

さすがに何発かは、かすりはしたが致命傷を負つてはいなかった。

「まずいな……」

雅一がピンチな時に。

突然装甲兵員輸送車の射撃手に銃弾が降り注ぐ。

一人は頭に直撃し倒れてもう一人は後ろから忍び寄ったキリによって切られる。

「おお!!」

雅一は、カノンたちの姿を確認する。

残り四人もカノンとシマリが放った銃弾により沈黙する。

そして、アヤネが装甲兵員輸送車の運転席に座っているNPCを引きずり出しナイフでバツサリ切ると戦いが終了した。

「サンキューなみんな!」

雅一は命を救われたのに感謝をする。

「まったく、とんだ荷物を見つけたかも」

カノンが毒づき。

「あれだけの人数でよく飛びこむような無茶をしますね。あなたはバカなんですか？バカ！？」

シマリが怒っているのだがどこか心配そうな感じで言う。

「まったく、そういう子。意外に好みよ」

アカネが雅一に近づく。

「それより、二人とも大丈夫！？」

近づいてくるアカネを無視する。

雅一の胸がドキドキしたのは男なので仕方のないことだ。

二人は建物から出てきた。

「ありがとう」

「ありがとうございますわ」

二人ともお礼を言う。

「二人とも名前は？」

茶髪のサイドポニーの女の子がまず最初に言う。

「私はシノミ。フリーの傭兵。そして、こっちの子が……」

シノミが紹介しようとしたときに金髪のロングのFPSには似合わないお嬢様のような女の人が口をはさむ。

「私の名前は、確か……ヒ・メでよかったでしたわよね？美夏ちゃん！？」

「わぁーわぁー、本名言っちゃダメ！！」

慌ててシノミがヒメの口をふさぐが時すでに遅く全員に聞かれる。

カノンがふざけて

「よろしくね！美・夏・ちゃん！！」

そう言うとシノミが顔を真っ赤にした。

8 新たなる増員 車両交換

「初めて聞きましたよこのGCTで本名なんて」

シマリが更なる傷口を広げようとする。

「ちょっと、ちょっと」

シノミが慌てているが

「あらあら～大変なことになってしまいましたわ」

ヒメは笑いながら状況を面白がっているかのように見える。

「ちょっと、ヒメにあればど本名をいつちゃだめって言ったのにさつそく破るなんてー！」

「まあまあ落ち着いて。美・夏・ちゃん」

雅一が言ったら。

『カチャ』

シノミがUMPの銃口を雅一の方に向ける。

「次にしゃべったら頭が吹っ飛ぶわよ。」

すぐに雅一は手を挙げて

「撃つな！はやまるな！話せばわかる！！」

「しゃべるなって言うのが聞こえなかったのかなー??」

シノミは、UMPのセーフティを解除する。

「二人とも落ち着いて」

カノンがUMPを手で持ち上にあげる。

最初の原因はお前だろうと雅一は心の中でつぶやく。

「そうですわ！……えっと、シノミちゃん！人にむやみに銃を向けては、いけませんわ」

ヒメも二人の喧嘩の仲介をする。

元々の原因は誰かな？そんなことを二人して考えていたことは二人とも知らず。

「それで、あなたたちは、フリーの傭兵ってことでいいのね？」

カノンが一番最初に聞いた。

「そう、でもヒメは今日が初めてなの。私が誘ったせいで」

シノミが顔を下に向ける。

「シノミちゃんそんなこと気にしてませんわ。」

ヒメは、暖かい笑顔で言う。

「でも……」

「それじゃあ、ヒメの事情を教えてくださいませんか？できる限りで」

雅一は、なるべく話をそらそうとした。

それにヒメは乗ったのか話し始める。

「私は、ずっとお家にいましたの。外出する時も周りに人がいるのが普通でしたわ。でもシノミちゃんは、そんな私を見て遊びに誘ってくれましたの。それで今日は、シノミちゃんがいつもやっている……えーとV…R…MM…O…F…PSというのを一緒にやりましようと言って誘ってくれましたわ。それが事情ですよ。」

「なるほど、それでこのサバイバルゲームに巻き込まれたわけだ。」

雅一は、ヒメとシノミの話を聞いて納得する。

さらに、ヒメがお嬢様だと推測できる。

カノンが顎に手を置きながら

「それじゃあ、私たちのクランに入らない？これから先、二人だけじゃあ大変そうだし、旅は道連れって言うでしょ。」

「それは、嬉しいですけど」

シノミは、難しい顔をして考えているが

「シノミちゃん。いいじゃありませんか。この人達となら大丈夫だとわたくしは思いますわ。」

ヒメがシノミに目をつるつるさせながら言う。

「ヒメがそういうなら。カノンさん私たちクランにはいますよ。」
うるうるに負けたシノミが頷く。

「さすが、美夏ちゃんですわ!」

「だから、本名言っちゃだめだつて!」

「ゴホッソ。それじゃあ、“月下の灯”にようこそ。シノミ、ヒメ! MCD貸してくれるかな?」

「はい」

シノミはすぐにMCDを渡すのだが、

「えむしでいゝ???」

ヒメは頭の上にはてなマークがたくさんついているようだった。

「これがMCD。結構重要なんだから大事にしないとだめよ」

シノミがヒメにMCDの説明する。
そして、カノンに渡す。

「これよしつと、二人ともこれからクランメンバーよ。よろしくね。」

新たに、二人仲間になった。

「私は、アヤネ。よろしく」

「シマリって言います。」

「…キリ」

三人とも自己紹介を終える。

「さて、この装甲兵員輸送車どうします?」

シマリが無傷のまま残っている装甲兵員輸送車を指さす。

「そうね。それなら二両とももらっていいとか。高機動車から武器弾薬を下ろして」

カノンが提案するのだが

雅一が疑問に思ったことを口にする。

「でも、一台はシマリが運転するとしてもう一人は誰が運転するんだよ?」

「私よ」

「カノンが!??」

雅一はカノンが運転技術を持っているなんて信じられなかった。

「何でそんなに驚くのかなー私は、車両程度なら運転できる技術を

「持っていますー」

アヤネが

「二人とも痴話喧嘩せず。武器弾薬の移し替えやるわよ」

「痴話喧嘩じゃない!!」×2

「息ぴったりじゃない」

「そうですわね」

カノンと雅一が息ぴったりな発言をしたあと
高機動者から装甲兵員輸送車に武器弾薬を移し替えて
二人の回収に向かった。

9 車両の説明 銃剣と銃撃音

「そういえば、この装甲車の名前なんだ？」

雅一は、でこぼこなコンクリートの道路の上をゆつくりと走っている装甲兵員輸送車に激しく揺られながらカノンに訊ねる。

「何だっけ？ キリ」

「BTR—D」

「そうそう、BTR—Dだ。たしか……」

雅一はいやな予感をしたが一步遅く。

「ソ連の装甲兵員輸送車で空中での輸送できて、空中投下も可能だったはず。兵員室には完全武装の空挺兵十人を搭乗させて輸送できて。兵員の乗降は、天井の二か所のハッチと後部の大ハッチがあつてそこから人の出入りができる。そして車体には二か所の銃眼があつて。消火装置とNBC防護システムも設備されている万能な装甲車なの。そして、NBC防護システムっていうのは、Nが核兵器を意味するNuclearでBが生物兵器を意味するbiological。最後にCが化学兵器を意味するchemical。その頭文字をとってNBC。それらに対応できる設備が備わっているってことね。」

またもや、先ほどの銃撃戦より激しい口撃の嵐に雅一は、ちょっと引き気味になる。

キリは、何もなかったかのようにして座っている。

「キリお前は大丈夫なのか？」

「…慣れた……」

そのキリの言葉がすごく印象に残った雅一だった。

「あと二人って何て名前なんだ？」

雅一は、揺られるなか頭をぶつけないようにしてカノンに聞く。

「あと二人は、カエデとシモハルよ。二人とも狙撃が得意なの」

前を見つつ雅一と話すという器用なことをしながら言う。

「ここのクランって結構バランスいいよな。狙撃が出来る奴や、近接戦闘が出来る奴、運転ができる奴もいるんだから。」

「そうね。集めたら勝手にそうなったのが正しんだけどね。」

車内は、エンジンと音と車輪が石を巻き込む音のみが聞こえてくるようになった。

前を走っていた装甲車から無線がかかる。

「こちら、シマリ。こちら、シマリ。聞こえますか？」

カノンが、無線のスイッチをオンにする。

「聞こえます。どうしたの、シマリ？」

「もう少しで合流地点に到着するのですがここら辺で降りて徒歩で行きましょう。」

シマリの提案に少し悩んだ後

「了解。その瓦礫の下に入れれると思うから、そこから徒歩で動ね。」

「シマリ、了解。」

無線の切れる音がする。

「二人とも聞こえたわね。」

「…うん」

「聞こえたぞ。」

そして、がれきの下に装甲兵員輸送車を二両入れる。

「二人とも出ても大丈夫よ。」

後ろにある扉から二人は出る。

「疲れましたわ。」

「ヒメ、大丈夫か？」

「肩が凝りそうね。」

もう一つの装甲兵員輸送車に乗っている3人とも出てきて背伸びをしている。

7人が集まりカノンが口を開く。

「シマリとシノミとヒメはここで待機して。4人で合流地点に向かうわよ。」

「ありがとう。カノンさん」

シノミがカノンに頭を下げる。

「もう、仲間なんだからカノンでいいわよ。」

「わかった。」

「他のみんなもいい??」

「了解」×6

各自武器弾薬を再確認して合流地点へと向かう。

「ここから、どれぐらいかかるんだ?」

「そうね…30〜40分ぐらいじゃない。」

剣が折れてしまったために変わりの銃としてM4を持っている雅一がAK-47を二丁もっているカノンに聞いた。

後ろからは、RPKを持っているアヤネとM4を持っているキリが

後ろから付いて来ている。

ちなみにキリのM4にはなぜ銃剣が装備されている。雅一のは、
アUNDERグレネードが装備されている。

「キリ、何で銃剣なんか装備してるんだ？」

雅一が後ろに向き疑問に思ったことを聞く。

「……弾薬がないから……」

「弾薬がない？」

キリの言葉にはてなマークを浮かべる雅一だった。

「キリは、銃剣が弾薬も関係なしに使えるからいいって言う事よ。」

カノンが代わりにこたえる。

「なるほどな」

雅一は、きらりと光る銃剣を一目見て前を向き直り進む。

数十分歩いていると。

バーン ドドド ダダダ ドン ドン

銃声音が鳴り響く。

「このパターンは……」

「まったく、あなたは本当に疫病神みたいね。」

「それは、言わない約束だろ!!」

四人は、走りながら銃声音が鳴り響く場所に向かう。

いつて見ると想像通り二人の少女がビルに立てこもって抵抗している風景が広がる。

「敵がおおいかしら」

アヤネが、状況把握をする。

「それなら、シマリに連絡して車を出せる準備をさせないと」

そう言つてカノンは、無線でシマリに連絡を取る。

「シマリ、緊急事態よ。あと3、40分したらそつちに向かうから、車をいつでも出せるようにエンジンを温めておいて。」

「わ、わかりました。」

シマリが慌てた様子で無線を切る。

カノンがみんなの顔を見渡す。

「ミノマサだっけ？名前。あなたのスキルでこの状況をどうにかできないの？」

「無理だな。さっきの時点でスキルを使い切って一日たたないと回復しないし、なんせ剣まで折れちまったからな。」

「使えない疫病神ね。」

「ほっとけ」

カノンが銃撃の音を聞きながらその様子を見て

「それなら、私と疫病神が二人の所に行くから、二人はここで待機して。」

「俺の名前は疫病神かよ……」

「わかった」

「…了解」

「へいへい、わかりました。」

二人はビルへと向かうために飛び出した

10 狙撃と下手 撤退戦序幕

ドドド ダダダ

敵のAK-47から吐き出される7・62x39mm弾がコンクリートに当たって穴をあけていく。

二人は、屈みながら少しずつ、がれきなどを盾に進んでいく。

「ストップ。ちょっと待ってね。」

ベルトから手榴弾を取り出してピンととり、投げ捨てる。

ドーン

爆風が起き破片が舞い散る。

「今よ！」

カノンの合図と共に屈むのをやめて一気にビルまで向かう。

カノンは窓から飛び込み。

雅一は、ドアからスライディングみたいな感じで中に入っていく。

「二人とも大丈夫！？」

「カノン！」

「やっと来てくれたー」

二人とも160?前後で一人が茶髪のショートの子で、もう一人が青色の髪で、後ろでお団子みたいな感じにまとめている女の子だ。その二人は、雅一に片手でもっている拳銃の銃口を向けている。

「はは…なんか俺のキャラって…」

おとなしく手を挙げてM4を地面に置く。

「二人ともその人は新しく入った人よ。」

「そうだ。ミノマサだよろしく。」

「そうなんですかー。私は、カエデといいまーす。」

茶髪のショートの子が拳銃をホルダーにしまう。

「私の名前は、シモハル。よろしく!」

青色の髪で、後ろでお団子みたいな感じにまとめている女の子も拳銃をホルダーにしまった。

「それで二人ともここから30分したところに車を待たせているからそこまで撤退戦よ。」

「いきなり、大変だな」

「もう、最後はおいしいものでも食べたいよー。」

二人とも絶望的な顔もせずに逆に明るい。

カエデは、M21を持っている。

シモハルは、M24を持っている。

M21はアメリカの軍隊が採用しているセミオートの速射ができる狙撃銃だ。

M24は、ボルトアクションの速射はできないが一発のダメージが大きい銃だ。

「ミノマサ！私たちがその扉から出ていくから」

カノンが銃声音でかき消されないように大きな声でいい扉の方を指さす。

「わかった！」

雅一も負けずと大きな声で了承する。

雅一が窓から顔をだしM4をぶつ放す。

撃つのだがすぐに銃撃が集中してすぐに隠れる。

「もうちょっと頑張つてよ！」

カノンたちが出るタイミングを見失う。

「ここは、私に任せなさい。」

カエデがM21を構える。

「それなら、カエデとミノマサ。援護よろしく。」

「ミノマサ君行くわよ!」

「了解!」

言葉と同時にカエデが窓から顔をだしM21を撃つ。

雅一も同時に顔をだしM4を撃つ。

「すげー」

雅一は、カエデの射撃の腕に感心していた。

一発一発が雑なのだが敵に吸い込まれるようにして当たる。それに比べて雅一はかすりもしない。

「あたらねー」

雅一が窓の下に隠れて弾倉を交換する。

二人が援護しているすきにカノンとシモハルは飛び出してアヤネとキリの居る場所に何とかたどりつく。

「シモハル久しぶり」

「アヤネさんも久しぶりですね。」

「感動の再開はこころへんにして二人をどうにかしないと」

十数人の敵に囲まれて二人は動けないでいる。
徐々に押されている。

ダダダ パスパス

コンクリートと銃弾が当たる音や貫通する音が聞こえる。

「この状況やばくないか……」

雅一が二回目の弾倉を交換している。

「弱音を吐かない！」

隣で力エデもM21の弾倉を交換している。

「あと弾どれくらい？」

「えーと」

雅一がベルトやポケットを探って

「あと、5つある。」

「そうですか……それならアングレでかく乱して合流しましょう。」

アングレと言うのは、アンダーグレネードの略称だ。

「わかった」

雅一がM4を構える。

「合図しますから5・4・3・2・1・今です!」

「おら、もてつけ!」

M4のM203 グレネードランチャーから40mmグレネードが撃ち出される。

ドカーン

激しい爆風と共に二人は動き出し瓦礫の下に来る。
それだけでは、敵の勢いは衰えずすぐに銃撃を再開する。

「これ以上いけん。」

雅一は、M4で敵を狙うのではなくただ威嚇するためだけに撃つ。

「ちょっとまずいですね。」

瓦礫のコンクリートがはがれていつている。

「ピンチだな。」

「そうかも……」

二人は、がれきの下で抵抗できずにいた。

11 撤退と倒壊 撤退戦前編

「どうするんだ!？」

雅一は、M4の弾倉を変える。

「動けないからどうしよう?」

カエデは息を整えている。

「カノンたちは何をしてるんだ。」

雅一が言つと同時に爆発音が聞こえて

「早く来てーーーー!!」

カノンの大声が聞こえる。

「カエデ走るぞ!」

「りょうかい!」

二人は走って行きカノンたちと合流する。

「今から少しずつ撤退していくわよ。付いて来て」

後ろからみんながついていく。

しかし、敵部隊もこちらに来て銃弾の嵐を浴びせる。

六人は瓦礫の下に隠れて銃弾を防ぐ。

「それじゃあ、交代交代で下がって行くから。肩で触れたら後ろに下がる方法で行くわよ！」

ここから見るだけで敵は3、40人入る。

「反撃開始」

カノンの言葉と共に銃弾をぶつ放す。

「おらおら！」

「散れー！」

「……」

そして、カノンがアヤネの肩をたたきカノンが後ろに下がる。

「まだまだ」

雅一はM4を確実に当てるように撃っているが当たらない。

その隣でシモハルとカエデが狙撃で確実に当てている。

「はい、次」

アヤネがキリの肩をたたき後ろに下がりRPKの弾倉を変える。

「…どうぞ」

キリがシモハルの肩を叩く。

その間にも銃撃はやまずコンクリートが次々とちりとなって舞う。

「次、カエデ！」

シモハルがカエデの肩をたたきM24から拳銃のM9に持ち替えて後ろに下がる。

「最後です。」

カエデが雅一の肩をたたき後ろに下がる。

「もういいかな。それじゃあ、炎の魔法でももらっとけ！」

炎の壁が出来て雅一は後ろに下がる。

「ミノマサ！あれ何！？」

シモハルが炎の壁を指さす。

「詳しいことは生き延びてからね。ミノマサ！アングレの煙幕で一気に距離取るわよ。」

カノンが質問を後からにして雅一に指示をする。

「了解」

雅一がM4のアンダーグレネードから煙幕弾が撃たれ周りが白く包まれる。

「今よ！速く！速く！」

六人は走って行く。

瓦礫を利用したりしながら進んでいく。

しかし、銃弾の嵐はやまず強烈な爆音と共にビルが倒れる。

「危ない！」

カノンが雅一を押して瓦礫を逃れる。

「た……たすかった」

目の前に瓦礫の残骸を見てほっとする。

「RPGまで使ってきた。」

「RPG??」

「RPGは、ゲームのジャンルのrole-playing gameの略ではなくて、ソ連が開発した携帯できる対戦車ロケットRPG-7で威力もそこそこあるわ。その略というのがRPG。」

手榴弾の爆発音や銃撃の音が響いている。

「なるほどな」

FPS系のリアルな銃に詳しくない雅一にとっては分かりやすい説明だった。

「敵がRPGまで持つてるとなると厄介ね。何か魔法使えないのだからかな。」

「残念ながら俺は専門が剣士で魔法は必要最低限しか使えないんだ。」

雅一は、剣士で素早さを特化させてあるため魔法は付加魔法を中心としていて攻撃魔法はたくさん覚えていない。。

「使えないわね。みんな！スタン投げるから走ってね。」

スタンと言うのはスタングレネードで閃光と音を出す非殺傷用の武器で目くらましには最適だ。

後ろから強力な光が放たれ音も一緒にまき散らす。

後ろを振り向かずにとただ前だけを向いて走っている。

カノン達がようやく装甲兵員輸送車が見えてくる。

「見えた！」

カノンが叫んだのと同時にRPG-7の弾頭が飛んできてそれがビルに当たり崩れ始める。

「みんな急いで！」

カノンがまた叫んで一斉に走り出すがシモハルとキリが取り残される。

カノン達との間にでかいコンクリート残骸と看板が立ちふさがる。
シモハルはボルトアクシヨンの連射に不向きな銃を使っているが、
ごい速さで撃っている。

キリもM4を丁寧に撃って近づけないようにしている。

二人はビルの中に閉じ込められている状況になっている。

唯一の窓は敵が来るため使えないでいる。

次々と敵が追ってきてAk-47をぶっ放している。

倒しても倒しても出てくる。

「キリどうしよう！切りがない！」

シモハルが叫ぶ。

「キリがいて切りがないか、ダジャレうまいな」

雅一が明るい声で叫ぶ。

「いったい何考えてるのよ!？」

カノンが怒り出してそわそわと焦りだしている。

「任せる。ロープだけ貸してくれ。さてとRPGで培ってきた技術
を見せますか」

雅一が準備運動をして体をほぐしたりしている。

「はい、ロープ。」

カノンが装甲兵員輸送車からロープを持ってきて渡す。

「カノンたちは、車に戻っていつでも出せるようにしておけ。」

「本当に大丈夫??」

心配そうな顔を見せる。

「大丈夫だ。」

「わかったわ。あなたを信じてみる。」

「ああまかせておけ」

カノンたちは装甲兵員輸送車へと戻って行った。

「さてと行きますか。」

雅一は目の前に立ちふさがるビルを眺めて動き出した。

1 1 撤退と倒壊 撤退戦前編（後書き）

誤字脱字、感想、評価待ってます。

12 付加魔法と脱出 撤退戦後編

雅一はビルを観察する。

一階部分はコンクリートのみだが3階部分辺りに人が三人通れる穴が開いていた。

「あそこだな」

雅一は魔法を使う。

「付加魔法を多重でかけて」

いろいろな魔法が頭の中をかけて様々な付加魔法を選び出す。

「これと、これとこれだな」

3つ付加魔法を選択して三重魔法を使う。

魔法は、体が軽くなる。ジャンプ力を上げる。足の下の負荷を軽減する。の三つだ。

雅一はもともと攻撃魔法は苦手だったのだが付加魔法はいろいろと覚えている。

今回はこの三つを使うことにした。

「さて、待ってるよ！」

魔法の能力からわかるように一気に三階部分まで飛び着地する。

その間銃撃音は鳴り響いている。

「どうする？」

「……」

二人は何とか耐えているだけで次にRPG-7の弾でも飛んできたものならば一瞬で粉々だ。

ドーーーーーン

突然上から轟音が鳴り響き、上の一部分が崩れる。

「何！？」

「…敵」

二人は慌てて銃を構えて砂埃が舞うのが終わるのを待っていると。

「ゴホッ。ゴホッ。手榴弾の威力強すぎだろ！」

突然雅一が降ってきたのだ。

雅一は三階部分から降りるところを探したのだが見つからず。

「ないなら作ればいいか」

シモハルとキリがいなさそうな場所を探して手榴弾を置いて走って離れようとするが手榴弾が爆発するのが早く。

ドーーーーーン

そのまま落ちて行った。

咄嗟に雅一は付加魔法を二つ掛けた。

一つは肉体強化。全身耐衝撃。

そして床に激突したがたいしたダメージにもならず周りは埃が待っているが立ち上がり。

「ゴホッ。ゴホッ。手榴弾の威力強すぎだろ！」

そういうと銃が向けられる音が聞こえて。

「ミノマサ!？」

二人の姿が見えた。

「二人とも無事か!？」

「…うん」

「もちろんです。」

敵の銃撃は砂埃により少しの間、静かな時間が続く。

「二人とも逃げるぞ！」

「どうやって？」

二人を雅一が両腕に抱える。

「ちょっと!!」

「……………」

付加魔法がかかっているために、軽々しく持ち上げる事が出来る。

そのまま三階部分まで上がってくると雅一の耳に大ダメージを与えるぐらいの大きなこれで

「あんた何者!？」

シモハルが叫んだ。

「うるさい！耳元で叫ぶな！…あと俺は正義の魔法使いだ！」

「正義の魔法使いね。へえ」

ちよつと冷めた言葉に聞こえた。

「な、なんだよ」

「いや何にも……」

その後シモハルが笑ったような気がした雅一だった。

「三階からどうするの？」

「そりゃ、こっからダイビングだ！」

「えええー……!!」

「行くぞ」

「待つて待つて」

シモハルが足をバタバタし始める。キリは黙ったままだった。後ろから爆発音が一気に聞こえて建物が崩れる音がした。

「さて、時間がないからいくぞ!!」

「きゃあああーーーー!!」

「…っ！」

三人は三階から飛びビルは爆発により崩れて行った。そして、雅一は二人を抱えたまま地面に着地して離す。

「こんな思い二度とごめん。」

「二人とも走るぞ!」

目視できる場所に装甲兵員輸送車二台止めてあり一台が後ろの扉が
あいていた。

三人は走りだすと後ろから敵兵が迫ってきた。

AK-47が放たれながら前進してきてRPG-7なども撃つてく
る。

「おーい、三人とも早く!」

シノミが後ろの扉が開いていない方の装甲車の上のハッチから顔を出
して手を振る。

「わかった!」

シノミは軽機関銃のRPKを出してきて援護射撃をする。

「あと少し」

後ろの扉まで10mをきる。

後ろの敵も迫ってくる。

「三人とも早く!」

アヤネが後ろの扉にいるその手にはAK-47を構えている。

「一人目!」

最初にキリが乗り込む。

「二人目！」

次に雅一が乗り込み

「はい、最後！」

最後にシモハルが乗るとほぼ同時に二両の装甲車が動き出す。

RPG-7を持った敵を発見するとシモハルがM24を構えて引き金を引く

バーーーーーン

たった一発で敵は倒れて上に向かってRPG-7を撃ちそれがビルに当たり倒壊して自分たちの方に来た。
そして、2、30人が巻き込まれる。

「ナイス！シモハル」

雅一がシモハルに親指をぐつと伸ばして手を出すと。

「当然！だってわたしだもん」

笑顔で言った。

二人も合流してようやくクランメンバーが全員そろって装甲車を走らせる。

「どうするんだ？」

雅一が運転しているカノンに聞くと

「これから、武器弾薬の補充をしにゲッターに向かうわ。ちょうど川崎ゲッターに近いから。」

「ゲッター？？」

雅一が聞きなれない単語を耳にしてカノンに聞き返す。

「行けばわかるわよ」

カノンはそれだけ言って運転に集中する。

クラン「月下の灯」は、一路川崎ゲッターに向かった。

0 / 1 地下

夕日が見える中、南下していき装甲兵員輸送車：BTR-Dが途中で止まった。

「よし、ここら辺でいいかな？」

カノンが運転席から出ていくとシマリも運転席から出て行き何やら話をする。

「ここらへんに隠しておけばいいよね」

「そうですね。一番いいと思いますよ」

シマリは納得した顔になり運転席へと戻って行く。
カノンも同じように運転席へと戻って行く。

「カノン？どうするんだ？」

「これから車を置いて、ゲッターまで歩いていくの」

「ゲッターってどこにあるんだ？」

雅一が周りの風景を見てきたのだが人が住んでいるような気配は一つもなかった。

「行けばわかるわよ」

さつきからカノンはこの言葉で事実を濁す。

「ここに入れて」

装甲兵員輸送車をがれきの下に入れる。

「みんな降りて隠ぺい工作するわよ」

全員が下りてきて二両の装甲兵員輸送車を隠す。

「これでいいかな」

瓦礫の色と同化していて見分けがつかないぐらい完璧なものになっていた。

それをたったの三十分でやってのけたのだからさらに凄い。

「ここから徒歩で行くわよ」

「了解」

「はい」

「わかった」

「わかったよ」

「わかりましたわ」

「了解です」

「はいはい」

「……うん」

七人が歩き始める。

もちろん武器を携帯しながらの徒歩だ。
しかしその武器に問題があったのだが

「何でハンドガンしか持っていないんだ？もしもの時に大変だろう」

「それは、今から行けばわかるわよ。アサルトライフルとか持っていいたら大変なことになるから」

カノンが雅一の質問に答える。

アサルトライフルと言うのは、連射が出来て、中近距離向けの銃のことを言う。

「さっきからはぐらかしてばかりだな」

「行けばわかると思います」

その愚痴にシマリが答える。

「そうかね」

雅一はホルダーの中に入っているMP433・グランチを触りながら進んでいった。

少し進むと住宅街からビルなどが乱立する都市部へと景色が変貌していつている。

「ここが川崎か。でも、人が住んでいる気配はないんだけど」

「みんなストップ」

カノンがみんなを止めて周りの様子を注意深く観察する。

「付いて来て」

動き始めるとみんなはそれについていく。

そして、川崎駅廃墟らしきものの中に入って行くのだが、そこで不自然な出入り口があった。

「大丈夫みたいね。走るわよ」

カノン以下ランメンバーが走ってついていくなか、雅一とヒメのみが状況を分かっていなかった。

不自然な出入り口の中に入って行くと、地下に続く道が出てくる。

「中に入って」

駆け足で全員、中へと入って行った。

地下へと続く道をどんどん進んでいくと人が三人ぐらい通れる扉が見てくる。

そして、突然目のあたりにある小さな扉があいて

「MCDを出せ」

とても深みのある言葉を発する。

「わかったわ。みんな、MCD貸して」

「ああわかった」

雅一はMCDを渡す。

全員分を扉についていて青く光っている所に、それぞれふれていく。

「全員OKだ。ようこそ川崎ゲッターへ」

扉が徐々に開いて行った。

扉をよく見てみると暑さが1メートルあまりあり、コンクリートでできていたためにすごい丈夫な造りとなっている。

「すげー」

雅一の目の前に広がったのは、一本の幅が20メートルあたりある所に人が所狭しと座っていたり通りがかったりしていたりしていた。

「こんなに人がいるのかよ……」

「違うわ。たぶん9割はNPCよ」

「あれがNPCなのかよ」

見てみると普通に動いている。

「ああなるほど。話さないんだ」

「正解。武器屋とかアイテム関連を撃ってるお店以外しゃべらないの。まずは休憩所を探さない」と

進んでいく。

周りには人がいてよけて通らないとうまく進めないくらいだ。

「あつた。あつた」

休憩所と書かれているところがあつた。

入って行くと、普通のホテルのロビーと同じだった。
タイル張りの床に観葉植物などが飾られていた。

「ずいぶん豪華な休憩所だな……」

雅一はポカンとした感じで周りを眺めている。

「みんな行くわよ」

ロビーに行っていたカノンが戻ってきて手にはカードを持っている。

「さあ、いくわよ」

壁の方に行きカードで触れると突然扉が出来る。

「すごいな」

「所詮、バーチャルだから何でもありませんよ」

そういつてカノンは中に入っていた。

みんなもそれに続いてく。

「なんじゃこりゃ!」

中に入った光景は畳張りで人が2、30人ぐらいは入れる大広間的なところだった。

ご丁寧に端っこに布団と座布団が人数分置いてある。

「ここは?」

「こんだけの人数をいれて安いといったらここしかなかったの。」

「金取るのか?」

「もちろん、お金は銃などを売ったり。任務をクリアするともらえる仕組みになってるの。」

「なるほどな……」

それぞれ座布団を持ってきて輪になるようにして固まる。みんな荷物らしきものは何一つ持ってきていない。

「ここでみんなにいい知らせと、悪い知らせがあるけどどっち聞きたい？」

「そりゃあ、いい知らせからだろ」

雅一が即答するとみんなも頷く。

「いい知らせは、神様はどうもやさしいらしく。シャワーとお風呂のシステムが加わってるわよ。あと食事できるよう、設定されている。」

「やった」

「嬉しい」

などと騒がしくなるところで雅一はカノンに聞く。

「そういえば、何でシャワーや食事が必要なんだ？」

「それは、人間が習慣としているところでの行動がないと、意外にだめなの。だからVRMMOは、必ず5時間で落ちるようになって

るでしょ」

「確かにそうだな」

VRMMOは、長時間プレイによる、現実世界の体の変調をきたさないために5時間と決めている。

5時間過ぎると強制退場させられるのだ。

だから、いつもやるときは時間に気を付けていたのだ。

「でも、食べなくてもいいよな？」

実質昨日から何も食べていないことに気付くそれは、空腹にならなかったことが一番大きかったのだ。

「そうね。GCT自体、別に食べる必要もないし、寝る必要もない。でも、人間の習慣はなかなか変える事が出来ないの。だから寝るし食べるの。でも、アイテムで体力回復系のレーションならあつたはず。」

レーションはパックの中に入っていて進軍の際や作戦中などに簡単に食べれるものだ。

「次に悪い知らせは……………」

「悪い知らせは……」

みんな静かになりカノンに耳を傾ける。

「米軍から任務が入って、次は米軍基地がある館山まで行くことになったわ」

カノンがMCDを指さしながら言った。

0 / 2 談話

「米軍から任務が入って、次は米軍基地がある館山まで行くことになったわ」

カノンがMCDを指さしながら言った。

「館山？」

「房総半島の端っこにある場所。まさか、ミノマサ知らなかったの？」

カエデが口到手を当てて笑う。

「そ、そんなことない！」

「はい、二人ともそれぐらいにして、まあ今日はこのままシャワーを浴びてご飯食べて寝ましょ。」

カノンの提案に一同賛成する。

「それなら…ミノマサさんが先に入ってくれないと」

シモハルが全員が立ち上がると口をはさむ。

「そうね…」

「確かにそうだな」

雅一もここでは空気を読む。
そして、シャワー室に向う。

「意外にリアルだな……」

くぎられていて合計10個シャワーがあった。
シャワー室の前には脱衣所がありそこで脱いでから、汗を流し終わると、10分で浴び終わる。

「ただいま」。シャワー結構良かったぞ。」

雅一が帰ってくる。

「早くない？」

「しっかり洗ってる。」

「きつたな」

女性陣から懐疑的な視線が飛んでくる。

「それはもちろん！」

「まあ…どうでもいいけど。さあ行きましょう」

「いっつー！いっつー！」

「……………うん」

「いきますわよ。美夏ちゃん」

「だから、本名言っちゃダメだって。」

「一日も入ってないのは致命的。」

「覗いちゃダメよ！」

最後にアカネがウィンクしながら部屋から出ていく。

「覗くかよ。命がいくつあっても足りないだろう。」

雅一は銃を何回も向けられて恐ろしさが骨の髄まで染み込んでみる。
覗きでもしたならば、体に風穴でも空いているだろう……とブルと
一瞬震える雅一だった。

「いや〜よかったね〜」

「おっさんみたいだよ。ハル」

カエデとシモハルが帰ってくる。

「お帰り〜」

「おお、しっかりと待ってたみたいだね。偉い、偉い」

シモハルが雅一の頭をなでようとしたが雅一が避ける。

「乗り悪ーい！」

「気にすんな！」

「お二人さん落ち着いて、ほらハルも」

カエデがシモハルをあやす。

「ハル？」

名前の下だけで読んでるのが気になった。

「ああ、ミノマサ君もハルでいいよ」

「それなら、俺もマサでいいよ。ハル」

「カエデは……カエデのまんまだね。」

「そうだね〜」

二人の息はぴったりだ。

「二人は、リア友なんか？」

リア友と言うのは、リアルの友達ようするに現実の友達の事をさす。

「そうそう。」

「私たち、学校が同じなの。」

「へえ〜そうなのか……」

「へえ、そうなんです。」

「しかも、カエデって本名と全然違うんだよ。」

「こら！ハル言っちゃダメ！」

二人がかわいらしく取っ組み合いをし始めてその後はすぐに会話に花が咲いていた。

次に、ヒメとシノミが戻ってくる。

「気持ちよかったですわ。美夏ちゃん」

「はあ〜もういいよ」

散々、本名を連呼されてシノミもどうでもいいようになっていた。

「ミノマサ。しっかりとここにいたよね」

「まったく、俺の信頼はないのかよ……。あと、俺の名前はマサでいいよ。」

二回連続、雅一を見た反応がこれだったためにもう呆れるを通り越していた。

「みなつ、だっただけ？」

「マサ、殺されたい？」

「いえ、まだ死にたくないです」

「それは、賢明ね」

「美夏ちゃん。落ち着いてくださいわ」

「はぁーーーー」

シノミは深いため息をつく。

「お疲れ！」

雅一がシノミの肩に手をバンバンと叩く。

シノミは項垂れてそれをかまっているヒメの構図が出来上がった。

「おいおい、どっちが保護者だよ……」

アヤネとキリが部屋の中に来る。

「あら、ミノマサくん。シャワー覗きに来なかったのね。せっかく待ってたのに〜」

アヤネが濡れた髪を強調させる。

「水の滴るいい女じゃない？」

「はい、もちろん」

雅一が即答するとアヤネがちょっとビクッとなる。

「まあ、いいこと言うわね。」

「……………」

キリはさつきから黙っている。

「あと、アヤネさん。俺の事はマサでいいですから、キリも」

「わかったわ。マサ」

「…………マサ…………」

「さあ、食事よ!」

カノンとシマリの手には、ポットと

「何で?カップ麺?」

大量のカップ麺を持っていた。

「だってー、便利なんだもん」

「そうですよ。便利なんで」

「それならいいが……………」

……………。

……………。

……………。

水が暖まりお湯になり、カップ麺に注いでいく。

そして、7人が一斉に麺をすすりだす。

雅一から見たら、とても異様な光景に見えた。

あつという間に食べ終わる。

「おいしかったけど、よくここまで再現できてるよな」

カップ麺は、現実通りの味だったので驚く。

「確かに、リアルすぎるよね。でも、満腹になった気がしない。ただ食べただけって感じ」

カノンに言われて雅一は気づくのだが満腹になった感覚が一切なかった。

「確かにそうだな……」

その後、雑談が始まり。どこかのお泊まり会みたいな感じになる。雅一は本当に死をかけたゲームをしているのかわからなくなる。

「話もここらへんにして寝ましょ。任務については明日ね。」

カノンがそういうと、布団を敷いて寝る準備を整える。もちろん雅一は完璧に隔離されている。

電気が切れて、真っ暗になる。

雅一は寝れずにいた。

凄く近くに女の人がいるということでドキドキしていたのだ。

雅一は今までこんなに近くで寝たことはなかったのだ。

寝れずにいたのだが、睡魔が誘ってきたときにようやく寝れたのだ。

0 3 受諾

朝は早くてみんな6時おきだった。

「そういえば…マサって何でその恰好なの？」

シノミが朝ごはんを食べている最中に突然質問し始めた。
ちなみに朝ごはんは、トースト二枚にレーションの肉みたいな奴だった。

「そついやあ、まだ話してなかったな。」

「そついえば、そうね」

カノンと雅一が納得する。

「それなら…簡単に」

雅一は最初、カノンに説明した通り同じ内容をみんなに話す。

……………。

……………。

……………。

「」愁傷様」

「運が悪いとしかいいようがない！」

「……どんまい……」

「何だが俺の方が落ちこんで、いくんですけど……」

雅一がうなだれる。

「それは置いて、今後の事を話そう。」

「おいてくなよ!」

雅一の突っ込みをスルーして、カノンが続きを話す。

「今置かれている状況は、生き残りをかけたゲームが始まって、何とかランメンバー全員を集める事が出来た。そして、このタイミングで米軍……ようするに運営側いや、このゲームの主催者が館山まで行けと言ってる。私たちは何もする事が出来ずにいる。こんな所かしら。」

カノンが要点要点でまとめる。

「うーん、それなら、このまま流されるのもいいんじゃない」

アヤネがそういうとみんなが驚いた顔になる。

「へえ……一番いやだと思ってたのに」

「そりゃあ、今すぐ抜け出したいけど、どうすることもできないし、

それにいい考えがあるから」

「いい考え?？」

「そうそう、でも今はまだ、ない・しょ！」

アヤネがウインクをする。

「それなら、このまま館山に行くことでいい!？」

「いいですわ」

「いいですよ」

「いいよ」

「もちです」

「……了解」

各々が返事をして、今後の行動方針が決まった。

「それなら、今から解放軍のコミユに行くから……マサとシノミ来てくれる。他のメンバーは、今のクランの倉庫に保管してある武器弾薬のチェックをお願い。」

「クランの倉庫？」

雅一が質問する。

「このゲームは、作戦中、MCDにアイテムをいれる事が出来ないの。だからポーチやベルト何かに収納していくんだけど、クランの倉庫は、ゲッターか米軍の基地に行けば、いつでも出せるような仕組みになっているの。だから、こういう時には便利なのかもね。」

「なるほど」

「それなら、一時解散！」

カノンの声にみんながそれぞれの役目を持って行動する。

「シノミ、マサ行くわよ！」

カノンが二人を連れて休憩所抜けて、人通りの多い道へと出てくる。

「ヒメの事なら大丈夫よ。みんながいるし……」

先ほどから後ろを気にしていたシノミに声をかける。

「そうですけど……」

シノミは、やはり気にしている。

「ところで、解放軍のコミュってなんだ？」

このゲームを始めてやる雅一にしてみれば謎だらけだ。

「コミュは、一種の情報室みたいな役割を果たしているの、そこで各ゲッターや基地ごとで情報のやり取りが可能なの。」

「へえ〜」

やたらこのゲームは細かい設定にこっているな、と思いながら雅一はカノンの後を追う。

カノンがある部屋に入って行ったので付いて行く。

中には、結構の広さがあり、真ん中にデカイモニターがあった。

「これは、生き残ったんですね。」

そして、三人の男性がいた。

「どうも」

「あなたたちは、クラン組んですの？」

反応したのが、小太りでいかにもでかいサングラスをかけた男の人が答える。

「いえ、違います。我々は、フリーの傭兵で、この不測の事態に対処するために一時的に協力することにしたんです。名前を言い忘れましたが、私は山田曹長といいます。」

そういうと、後ろにいた二人の男性も出てきて敬礼をしながら名前を言う。

「わたくしは、佐藤二等兵であります。」

坊主頭でガリガリの体系の人だった。

「自分は、鈴木伍長です。」

アフロに小太りの男だった。

「よろしく、私はカノン。克蘭“月下の灯”のリーダーをしています。」

「俺は、ミノマサ」

「私は、シノミ」

それぞれ自己紹介する。

「それで、カノン殿。貴方たちも任務を受けたのですか？」

山田曹長と言う人が聞いてくる。

「そうよ、館山まで行かないといけないの」

「おお、それは私たちと同じです。」

「そうなんだ」

「私は得た情報によりますと、東京湾にあるアクアラインを米軍が抑えたいので、そこを通れば簡単に行けるらしいです。」

モニターを指さす。そこには、アクアラインの神奈川側に青いマークがついている。

「情報ありがとう。それなら、私たちもアクアラインを通って行きましょう。貴方たちは何時行くの？」

「私たちは、二日後を予定しております。」

「私たちもそれぐらいかな。」

「それで、カノン殿。一つ提案なのですが、米軍のハンヴィーを一括購入しませんか？」

「ハンヴィーね……ちょうど家でも二台ほど買いたいと思っうちてたところなのよ。」

ハンヴィーは、アメリカ軍が使っている高機動多用途装輪車両の事で、その民用品がハマーと言う名前で売られているのが有名な車だ。

「なあ、カノン。何で一括購入するといいんだ？」

雅一がカノンに小声で話しかけるとカノンの方から小声で返答が来た。

「このゲーム、一括で買うとかなり安くなる時があるの。そういう所はリアルよね。」

「それでは、カノン殿。ハンヴィーを三台購入します。」

「よろしく」

山田曹長がモニターで操作している。

「ハンヴィーのハンガーが11番と12番と22番です。私たちは、22番を使いさせていただきます。」

「わかったわ」

「それでは、ご武運を！」

「ご武運を！！」

「グッドラック！」

三人は敬礼をして部屋から出て行った。

「ハンガーって何のことだ？」

雅一がまたカノンに質問をする。

「自分の車なんかを改造できる場所のこと、ゲッターごとにあるわ。」

「なるほど。車庫のことか？」

「そんな、センスのない名前じゃあ、却下ね」

「センスがなくて悪かったな」

カノンが一呼吸おいて

「それじゃあ、明日は、ハンヴィーの改造としましょう！」

カノンがウキウキで出て行き、それをシノミと雅一が付いて外に出た。

“月下の灯”は、アクアラインを経由して館山と向かうのであった。

0 ' 3 受諾（後書き）

東京湾に浮かぶアクアラインという表現をしましたが、そのまんま東京湾アクアラインをモチーフとしていきます。

今は、戦闘シーンもなく、説明ばかりですが、今後ともよろしくお願ひします。

0 / 4 準備

「みんな〜〜作戦決まったから来て〜」

カノンたちは、休憩所に戻ってきてから、全員を集めた。

「まず、アヤネ。武器弾薬どうだった？」

「ちょっとたりないかな？軽機関銃系を買わないといけない。」

「武器の類は、後で決めて……そうそう作戦は、アクアラインを経由することにしたから、そしてハンヴィーを二つ購入したから、アヤネやシマリ改造よろしく」

「ハンヴィーですか？腕が鳴ります」

「アクアラインを経由……危険じゃない？」

アヤネが少し思い出してカノンに聞く。

「大丈夫みたい。何でもアクアラインは米軍がおさえているから」

「それなら……でも、ハンヴィーは重武装にしないと、ハンガーどこ？」

「11、12番よ」

「わかった、シマリとキリ行くよ！」

「わかりました」

「……うん」

三人が走って行くと

「私も行きます。ほら、ヒメ行くよ」

「わかりましたわ」

「いつてらっしゃい」

シノミとヒメも後を追う。

「私たちは、武器の確認と、地図を見てルートの確認」

「わかった」

「あいあいさー」

「ラジャー」

雅一とシモハルとカエデが下手くそな敬礼をする。

「バカやってないで、武器の確認から」

「武器は……M4、M16、M21、M24、M60、AT-4C
Sやっぱり米軍の武器が多いな……」

「そりゃ、安く済むし。でも、中東からの横流し品を売っていると
ころや、欧州の武器を売っているところなんかもあるわよ」

「このゲーム相変わらず凝ってるな……」

その後、武器と弾薬を確認してから、ハンガーへと向かった。

「調子はどう!?!」

11番のハンガーへと入って行っただ。

「順調よ。私がハイスペックに改造してるから」

ハンヴィーの原形はとどめている。

「それで、追加で武器を購入してほしいの」

「どれ?」

「ハンヴィーの上部に着けるMk・19 自動擲弾銃とM2重機関
銃をそれぞれ一丁と、M249を6丁買ってきて、弾薬も多めで」

「そんなに乘せたら重量オーバーになるんじゃない？」

「大丈夫！私とシマリに任せなさい」

「そうです」

ハンヴィーの下からシマリが顔を出す。

シマリの顔は、少しの部分が炭で黒くなっていた。

「それじゃあ、私は武器と弾薬を買いに行くから。マサとカエデと
かも手伝ってあげて」

カノンがハンガーから出ていく。

「そういえば、お金って大丈夫なのか？」

雅一が隣に座っていたシモハルに聞く。

この世界に来てからお金の事をまったく考えていなかった。

「大丈夫、何て言ったって家のクランは、ランクがAなんですから
！」

「ランクがA？」

「はい、クランの中にもランクがあつて、S～Eまであるんです。
そしてランクが高いほど報酬が高額な任務を受ける事が出来るんだ
よ。だから、お金はよっぽどのことがない限り心配しなくてもいい
よー！」

「とんでもないクランに入っただよ……」

「な〜に。タイタニックにでも乗った気持ちでいても大丈夫だよ〜」

「それは、沈むだろ!」

「てへへ、気にしない、気にしない」

一日と半日かけてハンヴィーの改造が終了してから全員が集まり最終確認をする。

「作戦名は、“Operation Light daybreak” アクアラインを通って館山まで行くことが任務。改造されたハンヴィーには、それぞれ“ルナ”と“アルテミス”と呼称。」

ハンヴィーの改造された姿に雅一は驚いてしまったのだ。

ルナと呼称されることになったハンヴィーは、上部にM2が設置されて、助手席にも前方と横がカバーできるM249が設置されていた。後ろ窓から撃てるようにM249が設置されてほぼ全域がカバーできるようになっていた。改造した本人いわく「防弾ガラスや、装甲と、後エンジンにも手を加えたわよ」と少し笑いながら言うて

いた。

アルテミスと呼称されるハンヴィーには、上部にMk・19 自動擲弾銃というグレネードマシンガンが搭載されている他は、ルナと同じになっている。

「ルナには、シマリが運転手で、助手席にはキリ、上部がアヤネ、後部がカエデで。アルテミスは、運転手が私で助手席がマサで、上部がシノミ、後部がシモハル、補助がヒメ。こんな感じかな？」

「言い忘れてたけど、助手席の人が無線連絡役だから。」

アヤネが付け足す。

「補助とは何をすればよろしいのですか？」

ヒメが首をかしげる。

「補助は……補助よ！」

カノンが顔を合わせずに早口で言う。

「そうそう、ヒメはもしもという時の隠し兵器よ！」

シノミも慌ててカバーに入る。

「隠し兵器ですの。責任重大ですわね」

当人たちの本音を意図せずに勝手に気合を入れるヒメだった。

「これで、終わりかな？それじゃあ、明日の明朝と言っよりかは、深夜の2時半に起きて準備をして夜明けとともに出かけるわよ。それじゃあ、解散！」

全員が早めに寝て。

太陽が薄らと見えてきたときにハンヴィーがハンガーから外に出た。

0 weapon

メイン・・・主力銃、メインアーム
サブ・・・主力銃の補助をする銃
ピストル・・・拳銃、サイドアーム

ミノマサ

メイン M4 M203 グレネードランチャー 装備
サブ MP7
ピストル MP・433

カノン

メイン MK48 Mod0
サブ UZI
ピストル シグ ザウエル P226

ヒメ

メイン 89式小銃
サブ なし
ピストル ワルサー PPS

シノミ

メイン G 3 6 C

サブ H & a m p ; K U M P

ピストル グロツク 1 8 C

シマリ

メイン A U G A 3

サブ M A C - 1 1

ピストル グロツク 1 7

アヤネ

メイン S G 5 5 2

サブ F N P 9 0

ピストル ファイブセブン

カエデ

メイン M 2 1

サブ スパス15

ピストル ワルサー P99

キリ

メイン M16A4 銃剣装備

サブ MP9 サイレンサー装備

ピストル ベレッタ M92 エリートIA サイレンサー装備

シモハル

メイン M24

サブ ベネリ M4 スーペル90 米軍のM1014

ピストル ニューナンプM60

ハンヴィー

ルナ

M2

M249x2

アルテミス

M k . 1 9 自動擲弾銃
M 2 4 9 × 2

予備

M 2 4 9 × 2

M 4 × 3

バレット M 9 5 × 1

A T - 4 C S × 3

M 6 7 破片手榴弾 × 多数

スタングレネード × 多数

スモークグレネード × 多数

0 Weapon (後書き)

それぞれの性格にあった装備にしてみました。

もし、わからないのがあった場合、Wikipediaなどで調べてください。

作中の中では、すべて出していきたいと思います。
その時に簡単に説明すると思います。

1 Welcome by a shot sound in the day

Googleマップと睨めっこしながら書きました。

それぞれのハンヴィーに乗って地上へと出る。

川崎駅から少し離れた住宅街から出れた。

全員、都市迷彩の服に、ボディーアーマーを着ている。随分重たいのだが、飛んできた破片や、拳銃の弾ぐらいなら防げるということ、で、全員着用している。

「まずは、アクアラインまで向かわないと……」

カノンが運転しながら言う隣に座っている雅一が

「そういえば……あの三人組どうなったんだろうな？」

「さあ？でも、深夜に22番ハンガーに行ったら誰も返事がなかったから、私たちより早く出たんじゃない？」

「そうなのか……」

雅一は、印象的だった三人の事を思い出しながら、廃墟を眺めていた。

競馬場らしき残骸を横切り、人が誰もいない大通りを二台のハンヴィーが走っている。

「こちら……ルナ……こちら……ルナ……応答……して……」

雅一の横に置いてある無線機からキリの声が聞こえる。

「こちら、アルテミス。キリ、何でとぎれとぎれなんだ？」

「……それは……」

「それは、キリの話し方だから気にしないの」

カノンが隣からいきなり口をはさむ。

「……そう……」

「そうなのか……キリ、どうした？」

「……ルナ……って呼ぶ……」

「何で？」

無線を持ちながら疑問に思っている。ちなみに、無線は雅一の横に置いてあり、ハンヴィーの屋根と前と後ろの三か所にアンテナがついている。

「そんなの作戦中なんだから、敵に無線を聞かれたときに情報を特定されちゃうでしょ。」

「そんなの、ここは味方の範囲なんだろう？」

「気を抜かずに、いつも考えるの」

「はいはい。それで、ルナどうした？」

ルナと呼ぶのに少し抵抗感があつたが何とか言つ事が出来た。

「…異常…ない？」

「ああ、ないぞ」

カノンが運転しているアルテミスが先行して、シマリが運転しているルナが後ろから付いて来ている。

「…それなら…通信終了…」

その言葉と共に無線からノイズが聞こえる。

国道409号線を東進していく。

川崎駅より小さい駅の前に差し掛かった時に、後ろからシモハルが口を開いた。

「平和だね〜。敵もいないし、人の一人もないよ〜」

「物騒なこと言わないでください。本当に来たらどうするの!？」

「まあ、そんな時は、そんな時で」

「大丈夫ですわ。心配しないで、美夏ちゃん」

「はあ〜。そうですか……」

後ろで賑やかになっている。

「平和だな」

前の方を念入りに観察している雅一が独り言をつぶやく。

「このクランの売りよ！」

カノンが横から自慢げに言った。

そのまま何事もなく1キロ進んでいくと捨てて錆びついている車の残骸が放置されているところを通る。

「海が見える。」

「もうすぐ、アクアラインね。」

短い橋を越えて石油タンクの横を通ると、カノンが速度を落とす。

「この先は、米軍が押さえているらしいけど、何があるかわからないから、全員戦闘準備。マサ！シマリ達にも連絡して」

「了解」

雅一がすぐに無線のスイッチをオンにする。

「こちら、アルテミス。こちら、アルテミス。応答してくれ」

「……こちら……ルナ……こちら……ルナ……」

「ルナ、ここから速度を落として戦闘準備してくれ。もしも何か会った時は、首都高速湾岸線に乗って逃げるから、そのことを伝えてくれ。」

「ルナ……了解……」

スイッチをオフにして、雅一はM249を目の前に置いて固定する。同じようにシノミがMk・19 自動擲弾銃を構える。後部でも、シモハルがM249を出してきて固定する。

もう一つのハンヴィーも同じように、アヤネが上から顔を出してM2を構えたり、キリがM249の準備をする。

「それでは、行きましょうか」

アクアラインの料金所が見え始めると、そこに土嚢などで作られた簡易陣地が敷かれていた。

「警戒重に」

進んでいき、料金所まで行くと一人の兵士がこちらに来る。

「こちら、アクアラインを守っている米軍です。MCDを見せてく

ださい」

NPCらしい、無機質な声が聞こえてくる。

「はい」

カノンがMCDを渡す。

「認証確認、どうぞ」

MCDを見てから返す。

「それでは〜」

カノンたちのハンヴィーが料金所を過ぎてトンネルの中に入っていく。

続くようにシマリ達のハンヴィーも料金所を過ぎていく。

「これで、一安心ね。情報通りだった、っていう事かしら。警戒を解くように連絡して」

雅一は、聞くと返事もせずに無線を入れて

「こちら、アルテミス。警戒終了。警戒終了」

「……こちら……ルナ………了解」

すぐに無線を切る。

トンネルの中は、薄い黄色の蛍光灯で照らされていた。

進んでいき、半分を過ぎて6、7？地点で、爆発音と銃撃音がトネルの中で響く。

その音と共にカノンがブレーキをして、ハンヴィーを止める。同じようにシマリもハンヴィーを止める。

シマリが運転席からでてきて、こちらに来る。

「何があつたんでしょうか？」

「さあ？でも、ちょうど出口から聞こえてくるよね」

「そうですね」

話し込んでいると無線から声が聞こえた。

『こちら、解放軍！！こちら、解放軍！！現在、アクアラインの旧海ほたるPAで、敵と戦闘中、至急応援を頼む。こちら、解放軍……こちらかい……ドーン！！……ザザーザザー』

「これって……まさか私たちはめられた？」

カノンの叫びがトンネルの中で木霊した。

1 Welcome by a shot sound in the day

書いて圧倒的に自分のRPGに対する知識不足を思い知らされました。

なので、スキルや魔法を募集します。

強い魔法、スキルから、ネタ系の魔法、スキルでも何でもいいです。

名前と、効果などを書いて送ってください。

助けてくださいお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3966y/>

VRMMOFPSの世界でチートな主人公がチートな女性たちとクランを組んで。-

2011年12月3日18時59分発行